告書をもとに後日対談をもうけていただきました。就労は長い道のりですが、いろんな方との出会いをもっていたいたことで、「もう後戻りしないと」約束してくれました。展望が開けてきたような気がしました。

Kさんを通じてわかったことは、ホームレスの状況の厳しさです。高齢化が進む中で、ホームレス自立支援法はあっても今の状況では追いつかない。50才後半～65才の方が多く自立の道は本当に厳しい。高齢の方の中には、テントの中で、誰にも看取られることもなく、誰にも見つけてもらえる事なく亡くなり、何日も放置されたままの方を何人も見てきた事など、淡々と話されたのが印象的でした。本当に衝撃的な話でした。この話を聞いて私自身無力ですが何か役に立つことが出来ればと心から思ったのです。

最後に私が事例報告をする時、必ず言うことがあります。

「相談にきてよかった」「ありがとう」という相談者の声を聞いて、ホット胸をなで下ろし「この仕事」についてよかったと思う反面、これが終わりではなく始まりで今後の見守りが大切だと感じることです。

いろんな方々の相談があります。精神を病んでおられる方、母子家庭の方、若年の方、その方々それぞれに対応の仕方は違います。ただ言えることは、コーディネーター一人だけではこの仕事をしっかりと進められないこと。それは自分の資質やその向上の努力を軽くみるということではありません。自分の責任の重さや、対応する人々の期待の深さを肌で感じるからです。これからも関係機関や各相談員との密な連携、それに地域での組織の支えや協力の中で、私自身が中心になり、今まで通り頑張れる自分でありたいと思います。

2 若年者の就労支援

地域就労支援コーディネーターの活動を始めて4年目が経過します。その間、いろいろな人たちと出会い、コーディネーターとして悩み勉強させられたことが数多くあります。その中から、若年者層の事例を紹介させていただきたいと思います。

若年一人親家庭の母親の場合

若年者層と一言で言っても、いろいろなケースがありますが、今回は27歳女性のケースを紹介したいと思います。(属性は若年一人親家庭の母親。子どもは8歳と5歳の男の子2人)。経歴は高校を中退し1年半ほど働いていたが結婚をしたため退職。その後、婚姻期間中も1年ほどは働いた経験はあるものの離婚し生活保護を受給するようになる。こういった経過の中、彼女自身、このまま生活保護だけの生活でいいのかと悩みケースワーカー(生活保護担当者)と相談し、福祉介護の仕事に就きたいということでありました。そして昨年7月、八尾市地域就労支援センターに彼女が来所し相談を受けました。初めてあったとき、「この人は、介護職で働けるのだろうか?」という私自身不安でしたが、話を聴いていくうちに彼女自身、介護職として働きたいという希望が高く、離婚して3年未満ということもあり「芦原高等職業技術専門学校委託訓練」の「福祉介護実務科」に誘導し、無事、2級ヘルパーの資格を取得することができました。しかしながら、いざ働く段階になって、働くことに対して長いブランクがあり、また実習で介護に対して若干の不安があるとのことでした。そこで、八尾市産業振興課の主催で行われている「福祉関連事業所合同求人説明会」で

八尾市地域就労支援センター

地域就労支援コーディネーター 笠原辰司

つながりのある訪問介護事業所に求人募集をしているかを確かめ面接をお願いし、無事働き出すことができました。それから1ヶ月が経過したある日、彼女からセンターに電話がかかってきて「働く自信がなくなってきた」ということであり、再度、彼女から話しを聴き、「働くこと」と「介護職」という仕事に徐々に慣れるようにしてもらうために事業所に再度お願いをしました。

コーディネーターの役割

今回のケースでコーディネーターとして考えさせられたのは、若年一人親世帯の母親の多くは働いた経験が皆無に等しく、いざ働くとなったときに不安が出てくることが多いのであろうと感じました。それは、働いた経験のなさなのか、働きながらの子育てに不安を感じているのか、その不安を除去していくのを支援していくのがコーディネーターの役目だと考えています。今回は、八尾市で行っている「福祉関連事業所合同求人説明会」でつながりのある事業所をお願いをし、就労支援の意義を理解していただいたために彼女自身仕事ができるのだろうなと感じています。今後は、コーディネーターとして、福祉施策の活用はもちろんのこと他の職種についてもつながりをつくっていかねなければいけないと感じています。

最後に、彼女自身、現在は「1級ヘルパー」の資格取得をめざし、将来的には「介護福祉士」「介護支援専門員」をめざしてがんばっています。コーディネーターとして微力ながら何か支援ができればと考えています。